

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第24号

発行日 2011年7月25日 (年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 報告 2011年度部落史出張講座

### 地元で学ぶ地元の歴史 in 田中

#### 第1回

河原者

そのマルチイプルの面目

時代に名を残す川崎の者

講師 辻ミチ子さん

(元京都文化短期大学教授)

当資料センター主催の「部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史」を、五月二十七日、六月一〇日、二四日の三回にわたり左京西部いきいき市民活動センター(旧養正隣保館)で開催しました。この講座は、地域の歴史を地元の方々と共に学習することを目的として企画したものです。今回は部落解同盟田中支部のご協力のもと、地元の方々、教員の方々など毎回三〇名から四〇名の参加がありました。

講演の要旨は次の通りです。

\* \* \*



第2回出張講座 朝治武さん

現在の田中部落は、前近代では「川崎」と呼ばれ、室町時代には賀茂川と高野川の合流地点の西側に位置した。室町時代の史料によると、川崎の河原者は作庭にたずさわり、庭者の中には連歌をつくるような高い文化をもった者もいた。当時、武士が盛んにおこなった「犬追物」という行事では犬の世話などをする犬ひきの仕事もしていた。また、交通の要所である今出川口の番役などにもたずさわって治安維持の役目も負っていた。

また、川崎村独自の仕事として今出川橋の橋守りがあった。一八世紀末の今出川橋の管理をめぐる周辺の村々の争いの文書には、川崎村の仕事がまわりの村々から大変信頼されていたことが記されている。

被差別の位置にありながらも、大きな信頼を得るような仕事をしてきたということである。

#### 第2回

田中部落

改善運動から水平運動へ

朝田善之助の視点から

講師 朝治武さん

(大阪人権博物館学芸員)

まず最初に朝治さんは、部落解放運動に絶大な影響力をもっていた朝田善之助への強い関心と地域社会に根付いた水平運動の展開を重視する問題意識から、大学の卒業論文で田中の水平運動を取上げたこと、そしてその時の問題意識は今も継続していると語られた。

朝田の自伝『差別と闘い続けて』では、米騒動が水平運動成立への大きな契機で、改善運動・融和運動については反対・妨害するものとして描かれているが、当時の史

料を詳しく見ると、夜学校を設立した上田静一や青年会の寺田清四郎などによる部落の貧困脱却・人格形成を重視した改善運動が青年たちの自覚を高め主体を形成していく契機となったことがわかる。実際に田中水平社の中心になったのは改善運動を担った青年たちであつた。

これまで、改善運動を恩恵的・慈善的と批判する中で水平社がつけられたといわれてきたが、田中部落では改善運動を継承して水平社が生まれ、改善運動の役割ももちながら運動を進めていたと捉えるべきであり、改善運動を評価しなおす必要性があると訴えられた。

第3回

戦後の部落解放運動と

田中部落

講師 井本 武美さん

(朝田教育財団評議員)

まず昭和三〇年代の田中部落の生活実態を、当時の京都大学部落問題研究会が行った「京都田中部落総合調査」(昭和三一年調査)の報告書を使って説明された。多くの人々が、近くの河原でのバラスふるいや失業対策事業に就いてお

り、住宅は不良・過密・老朽の状態で人口密度も非常に高かった。また、不就学児童が四割近くもいるような状況であつた。

このような時期に大学進学で京都に來た井本さんは田中部落での運動に関わりはじめ、朝田善之助さんと出会う。そこではじめて、部落民がしっかりしていないから差別をされるのではなく、部落の生活実態そのものに差別があるということを考えはじめた。

昭和二六年の「オールロマンス糾弾要項」に書かれている様々な部落の実態は、井本さんが実際に市内の各部落をオルグしてまわつた時に眼にしたものであつた。

「市民的権利が不完全にしか保障されていないために差別観念を生み出している」といった差別の捉え方を当時の田中の解放運動は先駆的に発展させていく役割を担っていた。

差別が見えにくくなっている現在、地元での世話役活動・生活相談活動こそが必要とされており、これまでのそれぞれの運動の立場にとらわれず団結して町づくりを進める必要性を強く訴えられた。

本の紹介

黒川みどり著 近代部落史 明治から現代まで

井岡 康時

(奈良県立同和問題関係史料センター所長)

はじめに

黒川みどり氏は近代部落史に関する多くの論考を発表してこられた。とくに最近一〇年余は密度が濃く、単著にかぎってみても、『異化と同化の間 被差別部落認識の軌跡』(青木書店、一九九九年)、『地域史のなかの部落問題 近代三重の場合』(部落解放・人権研究所、二〇〇三年)、『つくりかえられる徴 日本近代・被差別部落・マイノリティ』(部落解放・人権研究所、二〇〇四年)、『部落差別と解放へのあゆみ 近代三重県における』(反差別・人権研究所みえ、二〇〇九年)と四書を公にされ、さらに今年(二〇一一年)に入つて、『近代部落史 明治から現代まで』(平凡社新書)、『描かれた被差別部落 映画の中の自画像と他者像』(岩波書店)の二著を世に問われた。評者も奈良県をフィールドに近代部落史の研究を進めてきたが、そうした者の一人として、また、

右記のような精力的な研究に敬意を表すためにも、近年の黒川氏の仕事と正面から向き合い、これに対する批評を行う責務があると考えてきた。小稿の課題は、本年二月刊行の平凡社新書『近代部落史』の書評であるが、以上のような思いから、同書を軸にしつつも、紙幅の許す限り他の著書・論文にも目を配り、黒川氏の描き出す近代部落史像について検討を加えてみたい。

一、『近代部落史』が提示した部落問題像

『近代部落史』について個々の実証の厳密度を吟味することは小稿の課題ではなく、また、そうした性格の書物でもない。比較的長い時代にわたる通史を描き、これを新書という器に入れて世に問うことの意味は、その主題が社会的な課題であり、解決の必要があることを多くの人に知らしめるということであろう。したがって批評

の眼目は、黒川氏が、今そこにある部落問題をどのようにとらえ、その歴史的形成過程をいかに描き出したのか、そして何を問題として提起したのか、といったことにあると考える。こうしたことを念頭において、『近代部落史』において示された部落問題像を紹介してみる。

黒川氏は現代の部落差別を、そして、それをなお解決しえていない今の社会と人間をどのようにとらえているだろうか。氏は二〇〇二年の東京都大田区、〇四年の三重県の意識調査をもとに、現代の結婚差別を、「身分に代わりうる生まれながらの境界を維持したい」(二五〇頁。以下、『近代部落史』からの引用の場合は頁を記す)という意識の表出とみる。一方、明治初年においても、「解放令」以後の「差別を欲する民衆」が、身分に代わる「生まれ」による線引きを求め(二三頁)たと述べている。前近代については明示されていないが、近現代を基底する人間像については、「身分に代わりうる生まれながらの境界」を生み出し維持することを求める存在として描き出されているといえるだろう。

右のような「境界」を求め続ける意識を、黒川氏は「人種主義」と名づけ、これが「近代社会における部落問題を存続させてきた重要な要因」であり、「今日に至るまで部落差別の底流を支えてきた」(二五三頁)としている。この記述

にあるように、『近代部落史』の構想を理解するためには「人種主義」がキーワードとなることは明らかである。そこで、次にこの概念の内容を確かめてみたいが、新書という性格から「人種主義」という視点に特化して論じること(二五四頁)はしないとしているので、他の論文(「人種主義と部落差別」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う 西洋的パラダイムを超えて』人文書院、二〇〇五年 所収)ともあわせて黒川氏の「人種主義」の内実をまとめてみると次のようになると思われる。

「人種」はしばしば生物学的な違いとして理解されるが、そうしたものは実在せず、実際には言語や慣習や生活様式など文化的な差異を根拠につくられた社会的構築物である。このようにとらえると、部落差別も「人種」にもとづく差別「人種主義」の一つとして把握

することができる。

人種が違ふとする言説に対する被差別部落からの長い抵抗の歴史があるにもかかわらず、あえて「人種主義」と名づけられた枠組みのなかに部落問題を位置づける利点は何か。黒川氏は、このことによつて部落問題を「日本の特殊性に封じ込めてしまふのではなく、近代社会のなかの他のマイノリティに対する差別とも対比しながら、それらと同列に考察すること」ができ、その結果、「部落問題研究に新しい地平」(二五三―四頁)を開くことが可能になるとしている。つまり、黒川氏にとつて「人種主義」という概念を用いることは、被差別部落の近代史の解明につながるというだけでなく、部落問題研究のパラダイムも変えていく戦略的行為であるといえるだろう。

では、「人種主義」はどのような形に形成されたのだろうか。明治維新期から一九〇〇年ころまでを描いた「第一章 近代国家の成立と再編される身分」からまとめてみる。

明治初期の差別意識は、「旧えた」身分に属していたことと、近世から持ち越されたケガレ意識

のみを抛り所(二六頁)としており、この段階では「人種主義」とは区別されるものであった。しかし、「解放令」以後、「差別を欲する民衆」は、身分に代わる「生まれ」による線引きを求め(二三頁)ていく。当初は「解放令」

がなお「一定の効力をもっていた」(三〇頁)が、松方デフレ期に入ると、被差別部落の窮乏化が顕著となり、「貧困であり、またそれゆえに不潔で病気発生の源であると見なされる」(四〇頁)ようになった被差別部落には、新たに「異種」という徴が与えられていくこととなった(四二頁)。さらにこのころ人類学者から被差別部落民が異人種であるかのような言説が出され、新聞にも報じられて流布していった。このようにして、「封建的身分制度の代替としての十分な機能をもった「人種」という標識」(四六頁)が生まれていった。

「人種主義」の成立過程は以上のように描かれている。新聞報道や人類学者の影響も指摘されているが、主として民衆が「欲する」ことによつて、近代になつてから「創造された」(二三頁)のである。

そしてこのようにして身についた「人種主義」は現代にまで続き、先にもふれたように結婚差別などとなつてあらわれていることが「第五章 戦後から いまへ」において述べられている。「人種主義」は、どのように近代を貫通しているのか、その克服の道筋をいかに展望できるのか、こうした問題への考察を深めるために第二章～第四章が準備されなければならないだろう。

「人種主義」の成立を描いた第一章を承けて、「第二章 帝国のなかの部落問題」では、一九〇〇年から二〇年ころまでの時期が次のように描かれる。

地方改良運動のなかで展開された部落改善政策は、「予算的裏づけもない精神的な」（六六頁）施策であつたため効果は上がらなかった。政府は、その原因を「被差別部落の人びとの「性情」に求めて説明」したため、「人種がちがう」という認識が（中略）浸透して」（同上）いくことになつた。こうしたなか、奈良県で創設された大同同志会は、「社会の認識のありようを問つた」（八五頁）新たな姿勢を示したが、一方で、

「人種主義」を喧伝する言説が横行し、さらに米騒動が発生すると、これに危機意識をもつた政府が、「民衆の差別感情を巧みにあやつり、被差別部落の人びとに米騒動の責任を着せることで、部落外への広がりや阻止しようとした」（一〇三頁）ため、新聞報道とも相まって、「暴民」・「特種民」像（一〇四頁）がひろまつた。

民衆の見方や感じ方に叙述の多くが割かれていた第一章と比較して、第二章では政府の施策に重心が移つていくように思われる。続く一九二〇年代については、「第三章 解放か融和か」に次のように描かれる。

歴史学者喜田貞吉が被差別部落の人種起源論を明確に否定することによつて、「政府が発行する冊子などで人種起源論が唱えられることはほぼなくなった」（一一四頁）、しかし、社会全体の認識を変えるには至らず、「文化的相違が絡み合い、きわめてあいまいな血筋、ケガレといったものに託して、「生まれながら」のちがいを強調する言説」（同上）はあとを絶つことがなかつた。こうしたなかで結成された全国水平社は、「ありのまま

の自分たちの誇り」（一二五頁）を前面に出して運動を展開して、多くの被差別部落住民の支持を得ることに成功し、政府も融和政策の充実を力注いでいった。ところが、こうした変化にもかかわらず、「人種主義」を克服するには至らなかつたことが一九二八年の三重県の調査からもつかがえる（一五三～一六頁）。

第三章は水平社運動や融和運動が主軸にすえられた叙述であつた。一九三〇年から四五年にかけては「第四章 「国民一体」と人種主義の相克」に次のように描かれる。恐慌が深まるなかで全国水平社の一部には組織の解消論もあらわれてきた。日中戦争が本格化し総力戦体制の構築が進められると、全国水平社は戦争協力を表明し、「国家主義実現に部落問題解決をゆだねる方向に転じた」（一六七頁）。一方、中央融和事業協会は、「人種」に代わつて「民族」概念を前面に出し、「日本民族」の一体性を強調することによりその内部に被差別部落の人びとをも取り込もうとする（一七九頁）ことによつて問題の解決を図ろうとしていった。

以上のように、黒川氏は近代の部落問題像を提示していると読み取つたが、これについて私見を二点述べておきたい。

二、「人種主義」の位置づけ  
「はじめに」において、黒川氏は、「部落問題をめぐる今日の社会のありよう」を「制度的には存在しない差別を社会の構成員が支えている」と表現している。そしてこうした「部落問題の いまに迫る」ために、社会が「どのよな線引き」を作り出し、どのようにして「境界を補強」したかを明らかにする必要があると述べている（一四頁）。黒川氏のこの意見に評者としても異議はなく、そのためには、「運動史や政策史ではなく、部落問題のありようを描くことを主眼に」（一五頁）置くとする、氏のねらいもよく理解できる。しかし、「人種主義」の始原を描いた第一章と、時間軸の最先端にある現代を述べた第五章をつなぐ、第二章～第四章の叙述は、前節でみたように「運動史や政策史」に多くをあてるものとなつていた。「はじめに」に示された意図は十分に実現されていないと感じた。しかし、このことは黒川氏一人

の力量の問題に帰することはできない。部落差別がなぜ克服され得ず現代にまで続いているのか、この本質的な問いに対する答えを準備するためには、黒川氏の表現を借りるなら、「生まれながらの境界を維持」することを求め、「差別を欲する民衆」の内側を剔抉する作業が必要であると思われるが、誰もまだ、この仕事をよく果たし得ていないと考えるからである。

なぜ、それは困難なのだろうか。さしあたって二つの障壁があると思う。一つは、部落差別という現在進行中の心性にかかわる課題を取り扱う以上、同じ現代を生きる研究者が対象化してその全体像を明らかにすることが容易ではないためである。ただし、これは部落史・部落問題研究に限らず、意識や観念、心性を探究しようとするすべての領域においていえることであろう。

今一つは、差別の私的性格によると考えている。現象学という視座から差別を考えようとしている郭基煥氏は「差別はいつも密室で行われる」(郭『差別と抵抗の現象学』(日朝鮮人の経験を基点に)新泉社、二〇〇六年)と記している。

黒川氏が指摘するような「町村合併における排除」(四七、九頁)や「差別意識を増幅させる」新聞記事(三七頁)など、公的な制度上での、あるいはメディアによる差別があつたことは否定しないが、それよりも日常の振る舞いや眼差し、一見善意に満ちた会話のなかなど、外からはみえにくい私的関係の内面に顕現するものにこそ注意を払うべきではないだろうか。「苦況に陥つた者は、密室内部のことばで自分の状況を理解しなくてはならなくなる」(郭前掲書)ことで、事態はいっそう深刻になるのだから、こうした困難を克服することは可能だろうか。適切な手法は評者にもみいだせないが、少なくとも前近代の差別は「身分に由来する」(四〇頁)ものであり、近代は「創造」された「人種主義」とする黒川氏の構想では難度が高まるばかりだと思つ。「生まれながらの境界を維持」することを求めるとい

ような関係概念のことである。三、政治権力、メディア、差別前節で述べたことは、差別を生活世界において内在的に把握する可能性についてであつた。むしろ、だからといって生活世界がそれ自体で完結していると主張するわけではない。近代においては、政治権力主体による統治がより強く力を及ぼすだろうし、成立した近代読者と共犯関係を結んだ新聞メディアの影響力も無視し得ないだろう。二点目として、こうした外在的な側面について述べておきたい。

う黒川氏の間人観は、前近代にも及ぼすことが可能であると考えられるし、そつであれば「人種主義」の射程もまた前近代にのばしてもよいのではないだろうか。このことについては、すでに今西一氏が『つくりかえられる徴』の書評(『部落解放研究』一六四号、二〇〇五年)において、「人種」や「民族」概念が近代国民国家の創造物であることは明らかだとしても、この論理だけで部落差別を説くことは不可能として、前近代から続く異人種観の根深さを指摘している。評者も今西氏の批評は正鵠を射ていると考えており、少なくとも近世近代にわたる異種観といったものを想定せざるを得ないと感じている。そのような枠組みのなかで、たとえば、黒川氏は同意されないかもしれないが、ケガレ観についてもより深い考察をもつて、部落問題のなかに定位しなければならぬのではないだろうか。むしろ、この場合のケガレとは、単なる汚物ではなく、文化人類学の関根康正氏が、「秩序の存立と表裏になつている」がゆえに、「ケガレ」という言葉は追放できても、ケガレという現象は人間社会から追放できない(関根「なぜ現代社会でケガレ観を問うか 現代社会における伝統文化の再文脈化」)。関根・新谷尚紀編『排除する社会・受容する社会 現代ケガレ論』吉川弘文館、二〇〇七年所収)と指摘する、その

まず、前者の問題から述べるなら、近代の国民国家が、自由や平等といった理念を広め、それを實現するシステムを確立する一方で、抑圧や排除などを強化するという矛盾に満ちた存在であることは、これまで国民国家論によって論じられてきたところである。こうした国家による統治が、どのような回路を通して差別意識に關与してくるか、論ずべき多くの問題があると考えられる。一方、近世史や近世近代移行期において研究が進められてきた地域社会論は、近世後期には村の指導層の間に広い範囲の地域を一つの公共圏としてと

らえる新たな秩序意識が芽生え、政策の形成主体として成長して行くこと、こうした動向は近代前期の地域秩序にも影響を及ぼしていることなどを明らかにしてきた。こうした地域からの秩序形成と、国民の一体性を創り出そうとする国民国家が、どのように対抗し、交錯し合うのが、近代史研究の重要な課題になっていると思われる。

こうした研究状況を踏まえるなら、たとえば、米騒動において「政府は、部落差別を積極的に利用した」（一〇三頁）といった統治観は、たとえ新書という容れ物ゆえの表現の限界があるにせよ、あまりに素朴すぎるのではないだろうか。

後者については、たとえば、一八八〇年代を描いた記述において、発行部数を伸ばした新聞が、「差別意識を増幅」（三七頁）させたとしている。一般的に新聞の購読者が大幅に増大するのは日清・日露戦争を経験する過程においてであり、それ以前の段階の新聞の影響力は限定的であったと考えるべきではないだろうか。マスメディアがしだいに影響力を強めるのである

うことは容易に想定できることであるが、そうであるからこそ、発せられた情報がどのように浸透していくかについては、慎重に検討されなければならない。おわりに

「人種主義の問題を提示しない近代論は、あえていえば、一種の冗談にすぎない」一九九六年に刊行された『死産される日本語・日本人「日本」の歴史 地政的配置』（新曜社）において著者の酒井直樹氏はこのように述べているが、差別を構造的に組み込んで近代を論じ切ることが、差別問題研究の老舗ともいえる部落史研究の責務であろう。むろん黒川氏に向けた批判は、同時に評者自らの課題でもある。実態から関係へのシフトは容易ではない。觀念、心性、表象、これらをめぐる社会的権力関係 こうした領域にさらに研究の歩を進めていかなければならない。そうした意味で、『近代部落史』について公にされた、映画を主題とする『描かれた被差別部落』に、評者としては、より豊かな可能性の沃野を感じた。

（平凡社刊、二〇一一年二月、平凡社新書、七八〇円）

本の紹介

筆坂秀世・宮崎学著

『日本共産党VS. 部落解放同盟』

笠松 明広

（部落解放同盟中央機関紙『解放新聞』編集長）

A この本を読んでどう感じましたか。

B 日本共産党と水平社は「近代日本の汚辱のなかから生まれてきた栄光の結社であった」というんですが、それにしても、この対談（宮崎学さんと筆坂秀世さん）は、あまりにもかみ合っていないし、日共と部落解放同盟との表層的な関係しか描ききれていないのではないか、と思いました。

もちろん、一九六〇年代から七〇年代を中心に、テーマを整理しながら解説する宮崎さんの手腕は見事です。さすがにこの時代を駆け抜けた者の真骨頂があらわれているんですが、重要な点で多くの欠落があるのではないでしょか。

A たとえば。

B 全国水平社の創立時から、部落解放運動は、「自ら解放せんとする者の集団運動」でありながら

人間解放を求める、いや、そのことと連動せざるをえない、つまり最大限綱領を求める社会運動だったのです。大窪一志さんがこの本の補論のなかで指摘するように、

「国家・行政が解決できるのは、政治的国家の領域の問題のみであり、市民社会の領域の問題を解決することは基本的にできない」、つまり「最大限でできても被差別民の「政治的解放」にすぎないのであつて、これでは差別の撤廃には見えない」という関係性が日共には見えなかつたし、いまも見えないのです。部落解放運動という、市民社会の深部に下降する闘いを、政治的領域での制度や法制定の要求に切りちぢめることが当然であるかのようにふるまうわけです（日共は、こうした切りちぢめすら、解放同盟を利するとして、しなかつた）。

敗戦後毛三二テーゼ路線をすえ、

- ジグザグをくり返す日共の歩みのなかで一貫しているのは、党の同心円の拡大をめざすことです。大衆運動、社会運動は、そのためのブールであるという認識なのです。
- 部落解放運動を個別の運動だとして、種差の別にこだわらず、普遍的なプロレタリアを軸にした、政治革命をめざす党に結集せよ、というオルグがおこなわれるのです。だからこそ、党の指導・指示に従わない部落党員は切り捨てられる。なぜ、どのようにして、かれらが党員として部落のなかから地区党で献身的に、党の部落解放運動への方針に疑問を持ちながらも、最初の出会いが日共というなかで活動するのか、という心情すらおしはかることもできず、切り捨てることができるのです。
- A なるほど。党による大衆運動、社会運動の食いつぶしですね。
- B 宮崎さんには、もっと明確に、日共の理論的誤りをいってほしかったです。
- A どういう風にですか。
- B 日共もマルクス主義者なら、原論レベルでちゃんと差別の問題を考えると。
- A 具体的には。
- B 『資本論』でマルクスさんは物象化を説明します。そこでは、あるものが関係のなかではじめて、ある属性を獲得するにもかかわらず、それらの関係から独立にあるものが、それ自身でそれらの属性を備えているかのように、人びとが取り違えることが物象化だと説明しています。しかし、錯視を生みだす社会関係が強固な実在であるかぎり、そこから生ずる錯視も、また実在性をもっている、という関係が成り立つのです。
- A 「差別観念は、その差別の本質に照応して、日常生活の中で、伝統と教育の力によって、自己が意識するとしなやかかわらず、客観的には空気をすうように労働者および一般勤労人民の意識の中に入りこんでいる」という、部落解放同盟の委員長だった朝田善之助さんの三つの命題に似ていますね。
- B この物象化の問題を砕いて砕いていこうと、こうなるのでしようね。
- A それを原論レベルの問題とすると、現状はどういうことになるのでしょうか。
- B たとえば、石元清英さんは「現在、同和地区で生まれている部落出身者の高祖父母（祖父母の祖母）十六人のうち、部落出身者が八人以下というひとは八八・六％である」という調査を紹介し、「つまり、現在、同和地区で生まれている部落出身者の九割近くは、その高祖父母の半分が部落出身ではないことになりました」とし、逆に、「もし高祖父母十六人のうち、その中に一人でも部落出身者がいれば、その人は部落民だとするならば、今の世の中、自分は部落民でないと言いきれる人は、いなくなると思います」とも語っています。
- A とくに都市部落は人口の流出が激しいんですね。だから血とこの問題ではとらえきれない、ということですね。
- B そうです。にもかかわらず、部落とよばれる、歴史的に形成されてきた地域にたいする記憶が差別を生みだしてきているのです。
- A だから、地域が改善され、住環境が変わっても、内部の住民の移動があっても、部落差別としてつづくんですね。
- B そうです。国民国家が形成され、あらゆるかたちでの差異、違いを差別とします。私たちと彼らとは違う、という境界、区別をつくり出し、差別をおこなう。
- A 宮崎さんに、そのあたりをきっちり提起してもらいたかった、ということですね。
- B それと、七〇年代を語るときに落とせないのは狭山闘争ですが、この対談では、ここも欠落しているのです。
- 「石川一雄の運命が、けっして石川ひとりのものではないことを、差別と迫害の日常生活のなかで苦しい体験を通して知っている全国六千部落三百万の兄弟は、自分自身の問題として狭山差別裁判を受けとめ、この運動の中心に立つことをもとめられている」として、本格的に狭山闘争が開始されたのが、一九七〇年でした。
- 教育、就労という、部落差別の根っこにある課題が如実に示されたのが狭山事件の被告とされた石川一雄さんの姿でした。そして、当然にも、狭山闘争は一九六九年に制定された「同和对策事業特別措置法」を武器に、部落の劣悪な環境の改善、教育や就労のための条件整備と獲得、という闘いと結合することが、中央本部の運動方針ではめざされたのです。

A そうですね。闘いは、大きく盛りあがりましたね。

B 被告という苛烈な環境のもとに置かれた石川さんは、獄中で苦学しながら文字を奪い返すことで、みずからの社会的立場を自覚し、にんげん として生きる力を獲得したのです。それは、差別のために閉ざされてきたあらゆる可能性を開花させる力を獲得した、ということだったんです。石川さんの自己変革の姿は、部落の仲間はずれより、部落外の人びとの共感もよんだのです。そして、狭山闘争を通じて、差別に反対し、その差別を生み出し、利用する権力に反対する闘い、反差別反権力の闘いが、部落内外の人びとによびかけられたのです。これは、部落解放同盟が一九七四年に提起した、被差別統一戦線という狭い枠を打ち破り、翌年に提起され部落解放中央共闘の結成というかたちでも結実した、反差別共同闘争の具体的実践でもあったのです。

こうした動きにたいし、日共は、「石川君を守る会」をつくり、これらのいう「公正裁判」をのみ要求する運動に切りぢぢめ、部落民のもつ広範な怒りを組織すること

はなかったのです。そればかりか一九七四年一〇月に二審で死刑判決を変更したうえで無期判決がでるにおよんで、闘争から完全に召還し、翌年一月の日共機関紙『赤旗』では、「一般「刑事事件」と民主的救援運動」と題する論文を掲載し、闘争から遁走したことを合理化し、「わが党中央は狭山事件について、無実の「えん罪」であると規定したことはなく」と二審判決を追認するにいたったので

A 宮崎さんが指摘するように、日共はみずからがコントロールできない、膨大な部落のエネルギーの狭山闘争での大爆発を恐れてきたのです。

B 「民主連合政府」樹立を目前に控えた、という主観的情勢判断の延長線上に、一九七五年に日共がおこなったのが「国民的融合論」の論理だてと、それを軸とした、大衆運動団体を分裂させる「全国部落解放運動連合会」の結成（七六年）でした。そして、「俗情との結託」をおこない、公然と部落差別を煽るといふ最悪の選択のなかで、それを党の前進のための集票活動に活かしてきたのです。すべてが、

日共党員の善意で敷き詰められた、党のための闘争、活動だったので

A 宮崎さんの重要な問題提起が、事業法にもとづく利権や暴力の問題ですね。

B この本の問題提起として重要なのは、高度経済成長期のなかでの社会運動の課題です。部落解放運動でいうと、「特別措置法」時代の運動と重なります。

高度経済成長のもとで奪われたものは何か。それは、中世以来、人びとがもちつづけてきたメンタリティだったのではないのでしょうか。宮崎さんのいう「掟」ということもつながります。

たとえば、渡辺京二さんが「近代天皇制はまさにこのような庶民意識、利害の体系としての市民社会の法則が貫徹すればするほど社会下層に垂直的に蓄積される挫折感に対し、「神の国」的な中世的統合の幻想を補償するものとして機能した」「日本の戦前ナショナリズムは、資本制市民社会的な諸制度機構をたえず理解しがたい異物と感じ、ただ自然的な正義の偏在という中世的幻想を天皇制に収奪されることよってのみ近代国

家に統合されたわが国の下層民の情念のなかに、その根柢をもっていた」として、「今日の日本大衆の意識は、利害の体系としての

市民社会の原理にけなげに適應しながら、なおかつそれを心からは肌になじまぬものと感じる土俗的土着的な深層は失っていないのである」「大衆の生活意識のもつとも土俗的な層は、日本天皇制を支援、スターリニズムの制覇を許容し、ナチズムを噴出させ、そして現に毛沢東主義を成り立たせている、蒙昧暗黒な部分である」（「ナショナリズムの暗底」）としたメンタリティが、最終的に解体された時期ともいえるんです。

A この渡辺さんの論文は、いづごろかかれたものですか。

B 一九七五年です。

渡辺さんの説明は、部落問題研究所の鈴木良さんが「明治中期に成立した地域支配構造が一九二〇年代に動揺を来し、戦後改革で衰えながらも、高度経済成長のなかで最終的に崩壊に至ったのではないか」という「地域支配構造論」での説明とも重なるんです。

ちょうど、この時期に本格的に展開されたのが、同和対策事業だっ



たんです。

「同和行政による事業は部落内の業者に優先的に配分されるが、それが地域社会における商習慣・力関係に直結する。地域における「トラブル」を避けようとする行政や銀行の姿勢はおのずと地域内の慣習や力関係に従うものとなる。利益誘導が利権となり、ときにその意志決定過程に暴力が介入する。対面的な力関係が支配してきた部落や下層社会であればなおさらである。地域社会と組織の民主主義、地域住民の自立を目的意識的な課題にしていなかり、同和行政は利権の構造を生み出すのである」

「行政権力の安定化をはかる警察権力もまたこの構造に加担する。地方行政における開発主義の論理は地域住民の自立化を育てず、これを破壊してきた」と友常勉さんが「芦原病院小史」について「（「ヒューマンライツ」第二七九号、二〇一一年六月）で指摘するように、こういった構造がうみだされたところもあったのです。」

A 今後の部落解放運動のなかで、自治・管理能力をどう身につけるのか、という点で大切な視点ですね。B そうです。

A 宮崎さんは、「組織は、その気があれば再建できるが、精神の復興はきわめて難しい。／解放同盟という組織の先行きを案ずることとはない。むしろ、水平社、部落解放同盟を支えてきた人たちの精神が風化すること、それこそを私は憂えています」と書いています。

B 全国水平社創立時の、あの輝きは、なによりも、部落解放「人間解放」という精神と人類最高の完成をめざすという、市民社会への同一化、融和の拒否、という点に見て取れます。部落解放同盟にもこの精神は受け継がれました。

全国水平社結成時の「宣言」が「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で結ばれているのは有名ですが、ここには部落の解放のみでなく、人間の解放をめざすことが宣言されています。「人間が神にかわらうとする時代におうたのだ」という前段のフレーズが、ここに結実されています。

あるいは創立時の綱領では、「吾等は人間性の原理に覚醒し人類最高の完成に向かって突進す」と、市民社会に埋没するのではなく、人間解放のために最先端の社

会を創り出す、という熱い思いが表現されています。

じつに、「人間」こそがキーワードなんです。そこにこそ意義と限界があった、という事実も、冷厳に見ておく必要があるのではないのでしょうか。

宣言の主要な起草者である西光万吉さんが描いた「人間」は、人間的な本質を身につけ、それが故に、「人間が崇めるから神は睥睨する」という関係のなかでのものなのです。だからこそ、人間が神にかわる、ということが主張されるのですが、そこかわる人間は神と同様、理念型としての人間なのです。宣言に書き込まれたのは、社会的諸関係の総体としての、生きた現実の人間ではないのです。

A 西光さんは、その後、日共に入党するのですね。

B その時点では、変革の主体としてのプロレタリアが理念となるのです。そして、一九二八年の三一五弾圧で逮捕され、一九三三年に「転向」し、仮出獄するんですが、獄中でしたためたという「マツリゴト」についての粗雑なる考察では、高次のタカマノハラ天皇をいただいた国家体制・

皇産主義の展開などが主張されているのです。新たな理念を創出したのです。そして敗戦後は和栄政策と、時代との関わりの中で、濃淡を取り変えながら、転回し深化していくのが西光さんの思想でした。

こうした理念の転回は、西光さん一人のものではなく、帝国主義による侵略戦争という波をかいぐるなかで全国水平社も同様でしたし、左翼の運動を担った人たちも一緒だったのです。

戦前との連続性をもったものとして、部落解放同盟の組織のありようや理論というものを、複眼の視点から見つめていくことこそが重要ではないでしょうか。

A そうですね。もう少し突っ込んだ本にしてほしかったですね。

（にんげん出版刊、二〇一〇年一〇月、モナド新書、九八七円）

の連載「性暴力を問う」を終えて 久場俊子 / 「パープルダイヤル」から「パープル・ホットライン」へ 性暴力禁止法をつくろう 近藤恵子 / 性暴力被害者を支援するために 性暴力救援センター・大阪 (SACHICO) から見えてくること 加藤治子 / 性暴力に対応できる司法を 段林和江

屠場 本橋成一

男がつくった神話「女人禁制」「大峰山」に登った女性へのインタビューから「大峰山女人禁制」の開放を求める会

阪田三吉と『王将』にみる虚像/実像の訴求力 部落問題に迫る遠近法としての映画 2 山本崇記

まちかどの芸能史 5 尾張万歳 村上紀夫

部落の文化と歴史 5 熊野・湯の峯温泉 説経節「おぐり」と現実の世界 川元祥一

部落解放 648 (解放出版社刊, 2011.7) : 630円

特集 部落問題と向きあう若者たち 3

はじめに 内田龍史 / 活動と子育てにおけるジレンマ 浦田舞 / 祖母から母、そして私がつなぐ解放運動 副島麻友子 / 10年たって話せるように 藤田真一

本の紹介

『地を這う祈り』(石井光太著) / 『難民への旅』(山村淳平著) / 『必生 闘う仏教』(佐々井秀嶺著) / 『文学者たちの大逆事件と韓国併合』(高澤秀次著) / 『べてるの家の恋愛大研究』(浦河べてるの家著) / 『それでも彼を死刑にしますか 網走からペルーへ 永山則夫の遥かなる旅』(大谷恭子著)

全国初、土地差別調査を規制する条例が成立 大阪府部落差別調査等規制等条例改正の意義について 赤井隆史 インタビュー 部落史を未来へ生かすために通史を書いた『これでなっとく! 部落の歴史』を発売して 上杉聡 まちかどの芸能史 6 万歳たちの日常 村上紀夫 部落解放研究くまもと 61号 (熊本県部落解放研究会刊, 2011.3)

特集 東アジアの移住と共生について

東アジアの移住と共生について 韓国と日本の場合 申明直

いま部落はどうなっているか 佐賀県の被差別部落生活実態調査によせて 再不安定化する都市型部落の労働と生活 妻木進吾

佐賀県の被差別部落生活実態調査報告書について 山本尚友

部落差別の現実と課題 S高校差別発言問題によせて ~ 1979年熊本商科大学 (現熊本学園大学) 就職差別反対闘争

の考察から ~ 津田ひとみ

「水俣病」差別発言を考える 中村秀之

対馬の部落について 2010年対馬フィールドワーク報告 花田昌宣

本の紹介 『わらいがおがイイオトコ』 教員・樋口輝幸 靴減らしの教育実践の軌跡 岩野正信

部落問題研究 196 (部落問題研究所刊, 2011.3) : 1,111円

近代日本における行旅病人・行旅死亡人対応法制の成立と展開 明治維新後の政府・府県の「行き倒れ」対応法規の検討 竹永三男

書評

塚田孝著『近世身分社会の捉え方 山川出版社高校日本史教科書を通して』 多和田雅保 / 塚田孝著『近世身分社会の捉え方』から何を学ぶか 北尾悟 / 高度経済成長期の部落問題に関する歴史研究の意義と課題 『部落問題解決過程の研究』第1巻<歴史篇>の検討を通して 朝治武

ライツ 144 (鳥取市人権情報センター刊, 2011.5)

今月のいちおし!! 『漂流少女 夜の街に居場所を求めて』 (橋ジュン著) 田中澄代

ライツ 145 (鳥取市人権情報センター刊, 2011.6)

今月のいちおし!! 『いつの日にか帰らん ハンセン病から日本を見る』 (加賀田一著) 川上学

リベラシオン 人権研究ふくおか 141 (福岡県人権研究所刊, 2011.3) : 1,000円

特集 大学の人権・同和教育

私の大学非常勤講師の歩みそして雑感 林力 / 大学の「同和教育推進教員」たり得たのか 川向秀武 / 大学における同和教育: 教育・運動・研究の課題と展望 熊本理抄 / 大学の人権教育・雑感 加藤昌彦

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 3 『全九州水平社史料集(仮)』草稿より 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

精一杯生きてきた 宮本秀雄さんに訊く 2 川向秀武

リベラシオン 人権研究ふくおか 142 (福岡県人権研究所刊, 2011.6) : 1,000円

席田・月隈の社会運動と生活 5 金山登郎

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 4 『全九州水平社史料集(仮)』草稿より 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

精一杯生きてきた 宮本秀雄さんに訊く 3 川向秀武

- 無実の人がなぜ虚偽の自白をするのか 冤罪事件の謎 1  
浜田寿美男
- 人権文化を拓く 165 被災障害者救援活動から1ヶ月 い  
のちを守る長い活動の始まり 橘高千秋
- であい 590 (全国人権教育研究協議会刊, 2011.5) : 1  
50円
- 無実の人がなぜ虚偽の自白をするのか 冤罪事件の謎 2  
浜田寿美男
- 人権文化を拓く 166 一人ひとりを大切にすることを 原  
ひとみ
- 同和教育論究 31 (同和教育振興会刊, 2011.3) : 1,50  
0円
- 特集 設立50周年を迎えるにあたって  
「御同朋の教学」往生浄土 試論 過去帳の現実に立っ  
て(続) 麻田秀潤
- 改めて、宗門とハンセン病差別との関わりを考える 棚  
原正智
- 長野教区基幹運動の卵 映画『夕焼けこやけで』 松嵜澄  
雄
- 映画「新・あつい壁」製作と人権 齊藤真
- 近世真宗差別問題史料 6 「(仮称)申物御礼銀等諸  
事記」「自剃刀冥加御定」 左右田昌幸
- 同和教育論究 総目次
- 奈良人権・部落解放研究所紀要 29号(奈良人権・部  
落解放研究所刊, 2011.3) : 1,500円
- 特集 第16回全国部落史研究大会報告
- シンポジウム 天皇陵をめぐる 今尾文昭, 高木博志,  
辻本正教, 吉田栄治郎
- 前近代分科会報告 「多様な被差別民」
- 近世夙村と中世非人宿 その継承関係をめぐって 吉  
田栄治郎/常陸国の「諸賤民・民間宗教者・芸能民」に  
ついて 坂井康人
- 近現代分科会報告 「差別糾弾闘争の再検討」
- 初期兵庫県水平運動における糾弾の再検討 高木伸夫/  
初期奈良県水平社の差別教育糾弾闘争と行政対応 駒井  
忠之/討論 廣岡浄進
- 奈良町近郊の歴史と文化を訪ねて 奥本武裕
- ヒューマンJournal 197 (自由同和会中央本部刊, 201  
1.6) : 500円
- 融和運動の再評価 13 解放と融和のゆくえ 宮崎学
- ヒューマンライツ 277 (部落解放・人権研究所刊, 20  
11.4) : 525円
- 大学における、これからの同和・人権教育、研究のため  
に 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 9 寺木伸明
- 先生 本郷浩二
- 部落解放運動と差別撤廃に向けた法整備 3 今後の課題  
友永健三
- ヒューマンライツ 278 (部落解放・人権研究所刊, 20  
11.5) : 525円
- 特集 マイノリティと東日本大震災
- 「ことば・表現・差別」再考 「いってもいいかも」編  
ヒューマンライツ 279 (部落解放・人権研究所刊, 20  
11.6) : 525円
- 『近代日本の「他者」と向き合う』に寄せて
- 黒川みどり/中嶋久人/廣岡浄進/吉田文茂/内田龍史  
/友常勉/阿部安成/戸邊秀明/宜野座菜央見/与那覇  
潤/山田智
- 走りながら考える 122 結婚と遺伝子検査結果 民間企  
業で検査が 北口末広
- ひょうご部落解放 140 (ひょうご部落解放・人権研究  
所刊, 2011.3) : 700円
- 特集 第25回人権啓発研究集会 in 姫路
- ルボ・祭礼差別 上 平野次郎
- 本の紹介
- 『1968 若者たちの叛乱とその背景(上)/叛乱の終焉と  
その遺産(下)』(小熊英二著)/『四百年の長い道  
続編 朝鮮侵略の痕跡を訪ねて』(尹達世著)/『力二は  
横に歩く 自立障害者たちの半世紀』(角岡伸彦著)/  
『ともだちのにおい』(兵庫県人権保育研究協議会絵本  
部会編)
- 研究所の本 『播磨国姫路高木村の高田家文書 近世後  
期を代表する製革業』(高田家文書解読研究会編)
- 部落解放 645 (解放出版社刊, 2011.5) : 630円
- 特集 「同宗連」30周年
- 「弥栄のきずな」に魅せられて 京都市立弥栄中学校の  
人権教育取材で見えてきたこと 林由紀子
- 内田雄造先生の死を悼む 部落のまちづくりに注目、指  
導してこられた理論家・実践者 山本義彦
- 怒 大阪浪速の太鼓宗団 国立民族学博物館の映像作品  
岸政彦
- まちかどの芸能史 4 万歳の時代 村上紀夫
- 資料 部落解放同盟綱領
- 部落解放 646 (解放出版社刊, 2011.5) : 1,050円
- 人権キーワード2011
- 部落解放 647 (解放出版社刊, 2011.6) : 630円
- 特集 性暴力をなくそう
- 性暴力のフェミニスト分析 性暴力問題に取り組む視点  
森田ゆり/被害者の思いを受け止める社会に 読売新聞

- 「差別事件」をめぐる「責任」回避の構造 日本基督教団東北教区を事例に 堀江有里  
昔話と日本人のアイデンティティ 「ホトトギスと兄弟」「猫檀家」「子育て幽霊」 丸山顕徳  
人権と部落問題 814 (部落問題研究所刊, 2011.4) : 630円  
特集 沖縄問題から憲法を考える  
書評 『部落問題解決過程の研究』第1巻 歴史篇  
現代日本民主主義の底流を歴史学が解明 井口和起 / 理論的深まりと新たな探求の宝庫 丹波正史  
塚田孝さんに聞く 教科書のなかの『身分制』をめぐる北尾悟  
文芸の散歩道 木村毅作「漂泊の女絵師」後日譚 秦重雄  
兎と亀の人生 名もなく貧しくともひたすらに 1 近くて遠きは 南野昭雄  
人権と部落問題 815 (部落問題研究所刊, 2011.5) : 630円  
特集 子どもの権利と保育  
大阪府民の目は確か 「人権問題に関する府民意識調査(抜粋)」から 谷口正暁  
文芸の散歩道 高浜虚子著『朝鮮』を読む 水川隆夫  
人権と部落問題 816 (部落問題研究所刊, 2011.6) : 630円  
特集 近世身分社会の授業  
湖北の戦国と近世身分制 水谷孝信 / 町の自治と掟を通して近世身分社会の姿にせまる 北尾悟 / 「近世身分社会」をどのように教えたか 島田茂生 / 幕藩体制動揺期の授業「祭に袴を着させてください」 田所顕平  
中川信義さんを偲ぶ 奥山峰夫  
文芸の散歩道 続・高榮蘭の『破戒』論を評す 川端俊英  
人権なら 4 (なら人権情報センター刊, 2011.4)  
大和高田市西郊の歴史・文化と部落問題を巡る 共和水平社の足跡  
季刊人権問題 363 (兵庫人権問題研究所刊, 2011.4) : 700円  
特集3 部落問題をめぐる動向  
今日の部落問題 田端保文 / 兵庫県にみる「人権(同和)行政」全国実態調査の結果分析 杉尾敏明, 村上保  
振興会通信 97 (同和教育振興会刊, 2011.3)  
同朋運動史の窓 7 左右田昌幸  
水平社博物館研究紀要 13号 (水平社博物館刊, 2011.3) : 1,000円  
史料紹介 全国水平社創立に関する三好伊平次(内務省社会局囑託)「復命書」 手島一雄  
植民地主義と「複合差別」を考える「私的」ノート 松村徳子  
戦後65年、全国水平社発祥の地から水平社運動と戦争・天皇制を考える 仲林弘次  
月刊スティグマ 177号 (千葉県人権啓発センター刊, 2011.4)  
特集 環境問題と福祉 / 市民の人権意識の現状について  
月刊スティグマ 178号 (千葉県人権啓発センター刊, 2011.5) : 500円  
特集 市民の人権意識の現状について 2  
月刊スティグマ 179号 (千葉県人権啓発センター刊, 2011.6) : 500円  
特集 市民の人権意識の現状について 3  
地域と人権 1099号 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.4.15) : 150円  
立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 7 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗  
子どもの「差別者」扱い根絶へ 変化踏まえ、さらに運動強化を(中) 西村導郎  
国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 13 丹波正史  
地域と人権 1100号 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.5.15) : 150円  
立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 8 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗  
子どもの「差別者」扱い根絶へ 変化踏まえ、さらに運動強化を(下) 西村導郎  
地域と人権 1101号 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.6.15) : 150円  
立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 9 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗  
国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 14 丹波正史  
ちくま 480 (筑摩書房刊, 2011.3) : 100円  
青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 46 第十章 モスクワの留学時代 3 沖浦和光  
ちくま 481 (筑摩書房刊, 2011.4) : 100円  
青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 47 第十章 モスクワの留学時代 4 沖浦和光  
であい 588 (全国人権教育研究協議会刊, 2011.3) : 150円  
人権文化を拓く 164 生徒指導と人権教育 つながる、つなげる 臼井義成  
であい 589 (全国人権教育研究協議会刊, 2011.4) : 1

- 異議あり1 夜間中学は本当に事業仕分けの対象にしてい  
いのか 次田哲治
- いのちを生きる40 五年目の春 長谷川洋子
- 花とマグマ 絵と詩 森永都子
- 濃水飛山記 藤田敬一
- こべる 219 (こべる刊行会刊, 2011.6) : 300円
- ひろば141 子どもたちが教えてくれた大切なこと “言  
葉にできない” 野元里佐子
- 尼崎だより35 東日本大震災の現場へ 中村大蔵
- いのちを生きる41 東日本大震災に思う 長谷川洋子
- 花とマグマ 絵と詩 森永都子
- 濃水飛山記 藤田敬一
- こべる 220 (こべる刊行会刊, 2011.7) : 300円
- ひろば 142 アメリカにおける「両側から超える」試み  
(続) M.O.エマーソンとG.ヤンシーの「相互責任アプ  
ローチ」論について 平川茂
- 部落問題とわたし 1 企業内同和研修の担当者として考  
えたこと 井村紘
- いのちを生きる 42 四月の東京 長谷川洋子
- 花とマグマ 絵と詩 森永都子
- 濃水飛山記 藤田敬一
- こるむ 5 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件  
裁判を支援する会刊, 2011.6)
- 朝鮮学校の歴史 4 「外国人学校法案」阻止、「各種学  
校」認可取得の闘い 金東鶴
- 佐賀部落解放研究所紀要 28 (佐賀部落解放研究所刊,  
2011.3)
- 高田保馬の部落問題論 田中和男
- 佐賀県における被差別部落の現状 「佐賀県の被差別部  
落生活実態調査」から 妻木進吾, 内田龍史
- 史料紹介 『口達録』(その5) 中村久子
- 雑学 37号 (下之庄歴史研究会刊, 2011.5) : 800円
- 植村寛さんを偲ぶ 上野茂
- 植村寛先生の思い出 喜多紘一
- 小さな疑問から 隠蔽とカムアウト 上野茂
- 重層化する<渡来人>のカノン 広野湧人
- 水平運動における北原泰作の思想的転換 朝治武
- 中上健次私論ノート22 高桑健二
- 日本国憲法の今日的意義 松塚信夫
- 狭山差別裁判 420号 (部落解放同盟中央本部中央狭山  
闘争本部刊, 2010.3) : 300円
- 野間宏とOさんの証言 4 庭山英雄
- 狭山差別裁判 421号 (部落解放同盟中央本部中央狭山  
闘争本部刊, 2010.4) : 300円
- 野間宏とOさんの証言 5 庭山英雄
- 狭山差別裁判 422号 (部落解放同盟中央本部中央狭山  
闘争本部刊, 2010.5) : 300円
- 野間宏と寺尾判決 1 庭山英雄
- しこく部落史 13号 (四国部落史研究協議会刊, 2011.  
5) : 500円
- シンポジウム「四国の門付芸」  
「三番叟まわし」門付けの記録から 中内正子・南公代  
/土佐の門付け芸と芸能 1 黒岩伸安/愛媛の「門付芸」  
の考察 五藤孝人/讃岐高松藩における阿波人形廻し関  
係史料 山下隆章/討論 水本正人  
讃岐国鶴足郡造田村西村家文書に見える阿波人形廻し関  
係史料 山下隆章
- 土佐の門付け芸と芸能 2 黒岩伸安
- 門付け芸のフォークロア 三番叟まわし・えびすまわし  
の民俗調査に向けて 高橋晋一
- 祭礼(御開帳・市立・芝居等を含む)時における「かわ  
た」の警固について 水本正人
- 社会科学 91号 (同志社大学人文科学研究所刊, 2011.5) :  
1,000円
- 20世紀初頭におけるアカデミズムと部落問題認識 鳥居  
龍蔵の日本人種論と被差別部落民調査の検討から 関  
口寛
- 女性歴史文化研究所紀要 19号 (京都橘大学女性歴史  
文化研究所刊, 2011.3)
- 幕末維新の朝・幕の女性 和宮と九条夙子をめぐって  
辻ミチ子
- 資料館紀要 39号 (京都府立総合資料館刊, 2011.3)
- 京都町奉行所関係資料集 3 古久保家文書 歴史資料課
- 人権教育研究 19 (花園大学人権教育研究センター刊,  
2011.3)
- 障害者権利条約の構造 慎英弘
- 可能性としての青い芝運動 「青い芝 = 健全者手足論」  
批判を足がかりに 小林敏昭
- <老い>の可能性とエイジズム 「社会問題としての高  
齢化社会」論批判 八木晃介
- わが国における老いと認知症に関する認識 『官刻孝義  
録』から見た江戸期の高齢者介護 根本治子
- 社会福祉サービスのモジュール化と研究課題 安田三江  
子
- 痴漢冤罪の可能性がある事案 2 脇中洋
- 潜象的領域の意味と価値 島崎義孝
- 情緒的布教とその功罪 御詠歌の歌詞と意味 中尾良  
信

- 女性とイエス 1 「部落差別を怖れない関係」と「差別と闘うこと」...わたしのエンパワメント 福岡ともみ  
カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター  
たより 24 (カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊, 2011.3)
- 第3回対話集『忌避意識』 両側から超える営み 講師: 山下力, 住田一郎 コーディネーター: 前川修  
かわとはきもの 155 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2011.3)
- 靴の歴史散歩 100 稲川實  
皮革関連統計資料  
関西外国語大学人権教育思想研究 14 (関西外国語大学人権教育思想研究所刊, 2011.3)
- 開発途上国の児童労働問題 内田智大  
アメリカ映画を観よう 人権関連場面の案内 1 岡田広一  
川崎市子ども人権オンブズパーソン条例について~平成22年報告書を中心に~ 久禮義一・平峯潤  
ニューカマーの生徒が多く学ぶ大阪府立長吉高校のこと 北條秀司  
在日ラティーノと日本人の接点 アンケート調査による在日ラティーノ受け入れについての考察 山森靖人  
資料 外国映画人権関連小一覽  
関西学院大学人権研究 15 (関西学院大学人権教育研究室刊, 2011.3)
- 近代日本の社会事業雑誌 『教誨叢書』 室田保夫  
新聞を通して「いのちと平和」を考える~関西学院中部での取り組み 福島旭  
アンケートを用いた人権教育の効果測定の試みについて 川村暁雄、前川裕史  
外国にルーツを持つ子どもたちの悩み 自宅放火と自殺そして名前調査から思うこと 辻本久夫  
大学における人権教育の課題 「貧困の連鎖を断つために 人権教育を通じて何ができるのか?」を振り返って 阿部潔  
関西大学人権問題研究室紀要 61号 (関西大学人権問題研究室刊, 2011.3)
- 大坂町奉行所の刑事判例 5 大坂城代土屋氏御用留による 藤原有利  
同一形態漢字語における中国朝鮮語に対する漢語の意味干渉の事例 熊谷明泰  
ハンセン病問題にみる排除と隔離について 無癩県運動を中心に 宮前千雅子  
西光万吉の自己形成 1 水平社創立“前夜”の実存の展
- 開 宮橋國臣  
関西大学人権問題研究室室報 46号 (関西大学人権問題研究室刊, 2011.1)
- 被差別部落の明示は差別なのか 住田一郎  
京都市政史編さん通信 40号 (京都市市政史編さん委員会刊, 2011.3)
- 児童公園・児童館・ちびっこひろば (下) 森川正則  
京都部落問題研究資料センター通信 23号 (京都部落問題研究資料センター刊, 2011.4)
- 三浦参玄洞の水平社記事について 「中外日報」を中心に 3 秋定嘉和  
本の紹介  
『神戸ブント 藤本敏夫のうた』 (和田喜太郎編) 高木伸夫 / 『ルポ 餓死現場で生きる』 (石井光太著) 渡辺毅  
収集逐次刊行物目次 (2011年1月~3月受入)  
グローブ 65 (世界人権問題研究センター刊, 2011.4)
- 職掌人 (職人) へのまなざし 山路興造  
人権の“館” 高麗博物館  
藝能史研究 190 (藝能史研究会刊, 2010.7) : 1,800円 書評  
山路興造著『京都 芸能と民俗の文化史』 村上紀夫 / 小森崇弘著『戦国期禁裏と公家社会の文化史 後土御門天皇期を中心に』 家塚智子  
国際人権ひろば 96 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2011.3)
- 特集 シンポジウム「若者が語る多文化共生~外国にルーツをもつ子どもの権利を考える」  
国際人権ひろば 97 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2011.5) : 350円  
特集 企業と人権を考える  
こべる 217 (こべる刊行会刊, 2011.4) : 300円  
尼崎だより34 少しであっても、可能性にかけてみよう  
非行少年補導委託の現場から 中村大蔵  
寸評と合評1 同和教育の新しいあり方の提示 石元論文が提起するもの 平川茂  
こころのつばやき2 わたしの村と「無縁社会」 井貝順子  
いのちを生きる39 がん告知について思う 長谷川洋子  
花とマグマ 絵と詩 森永都子  
濃水飛山記 藤田敬一  
こべる 218 (こべる刊行会刊, 2011.5) : 300円  
ひろば140 共に生きる 子どもたちの成長を信じて 長縄良樹

山口公博が読む今月の本

『親鸞』（倉田百三著）／『近代部落史 明治から現代まで』（黒川みどり著）／『日本語の古典』（山口仲美著）

今週の1冊 『マンガはなぜ規制されるのか 「有害」をめぐる半世紀の攻防』（長岡義幸著）

解放新聞 2520号（解放新聞社刊，2011.5.30）：80円  
東日本大震災特集号雑誌をよむ 1

今週の1冊 『日本語教室』（井上ひさし著）

解放新聞 2521号（解放新聞社刊，2011.6.6）：120円  
解放の文学 61 佐藤泰志『海炭市叙景』 音谷健郎

東日本大震災特集号雑誌をよむ 2

今週の1冊 『サイゴン ハートブレイク・ホテル 日本人記者たちのベトナム戦争』（平敷安常著）

ぶらくを読む 62 大逆事件100年が教えるもの 社会運動が知識社会と結びつく「恐怖」 2 湧水野亮輔

解放新聞 2522号（解放新聞社刊，2011.6.13）：80円  
東電福島第1原発事故のいま これからどうなる？ 小林圭二さん報告

解放新聞 2523号（解放新聞社刊，2011.6.20）：80円  
山口公博が読む今月の本

『覚えておきたい極めつけの名句1000』（角川学芸出版編）／『『1Q84』批判と現代作家論』（黒古一夫著）／『小事典からだの手帖』（高橋長雄著）

解放新聞 2524号（解放新聞社刊，2011.6.27）：80円  
解放の文学 62 「戦争」に迫る新たな試み 百田尚樹『永遠の0（ゼロ）』 音谷健郎

今週の1冊 『すべてを明日の糧として 今こそ、アイヌの知恵と勇気を』（宇梶静江著）

解放新聞大阪版 1868号（解放新聞社大阪支局刊，2011.4.18）

府民意識調査結果がまとまる

解放新聞大阪版 1869号（解放新聞社大阪支局刊，2011.4.25）：70円

府民の人権意識調査 2

解放新聞改進黨 411号（部落解放同盟改進黨支部刊，2011.4）

道徳教育では差別はなくなる～4月から「小学校学習指導要領」が完全実施される～

解放新聞京都市版 236号（部落解放同盟京都市協議会刊，2011.6）：150円

差別発言事件5.26確認会

解放新聞京都版 883号（解放新聞社京都支局刊，2011.4.1）：280円

2011年度一般運動方針（第1次案）

解放新聞東京版 766号（解放新聞社東京支局刊，2011.6.15）：90円

特集・差別犯罪と闘うために 1 ヘイトクライム法はなぜ必要か 1 前田朗

解放新聞奈良県版 932号（解放新聞社奈良支局刊，2011.3.25）：50円

主張 アイデンティティの側面からみた、部落解放運動の現状と未来 4

解放新聞奈良県版 933号（解放新聞社奈良支局刊，2011.4.10）：50円

主張 アイデンティティの側面からみた、部落解放運動の現状と未来 5

解放新聞奈良県版 934号（解放新聞社奈良支局刊，2011.4.25）

主張 アイデンティティの側面からみた、部落解放運動の現状と未来 6

解放新聞奈良県版 935号（解放新聞社奈良支局刊，2011.5.10）

主張 アイデンティティの側面からみた、部落解放運動の現状と未来 7

解放新聞奈良県版 937号（解放新聞社奈良支局刊，2011.6.10）：50円

主張 県内6部落の戸数等の歴史的变化から見えるもの 1 解放へのはばたき 90（日本基督教団部落解放センター刊，2011.4）

特集 「南食ミートセンター」を訪ねて 塩谷さんと飯野さんにきく

語る・かたる・トーク 195（横浜国際人権センター刊，2011.5）：500円

古文書はかたる古文書に聴く 番外・東日本大震災によせて 上州鎌原村の復興から学んだこと 斎藤洋一

同和問題再考 124 食肉 田村正男

子どもたちは輝いていますか 1 江嶋修作

語る・かたる・トーク 196（横浜国際人権センター刊，2011.6）：500円

古文書はかたる古文書に聴く 信州の近世部落の人びと 71 斎藤洋一

同和問題再考 125 雪駄と三味線 田村正男

[河合文化教育研究所] 研究論集 8（河合文化教育研究所刊，2010.12）

「非人」呼称の登場とその変容 八箇亮仁

カトリック部落差別人権委員会ニュース 132（カトリック部落差別人権委員会刊，2011.3）

# 収集逐次刊行物目次 (2011年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- 明日を拓く 87 (東日本部落解放研究所刊, 2010.12) : 1,050円  
 特集 故・中山英一氏を追悼し、その足跡を追う  
 本の紹介 大森直樹編『子どもたちとの七万三千日 教師の生き方と学校の風景』桐畑善次  
 ウィングスきょうと 103 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2011.4)  
 図書情報室新刊案内  
 『ミボージン日記』(竹信三恵子著) / 『メンズのための安産バイブル』(大葉ナナコ著)  
 ウィングスきょうと 104 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2011.6)  
 図書情報室新刊案内  
 女性労働問題研究会編『女性労働研究55号 均等法25年と女性労働 分断から連帯へ』 / 菅聡子著『女が国家を裏切るとき 女学生, 一葉, 吉屋信子』  
 大塩研究 65 (大塩事件研究会刊, 2011.6)  
 酒井一会長追悼号  
 解放教育 522 (解放教育研究所編, 2011.5) : 770円  
 特集 ジェンダー平等教育の現在  
 バックナンバー (509号～520号)  
 解放教育 523 (解放教育研究所編, 2011.6) : 770円  
 特集 人権教育のウィングを広げて 第60次日教組教研集会・茨城県水戸市から  
 資料 「久留米発 今ここ!自分ごとの人権・部落問題学習」  
 解放教育 524 (解放教育研究所編, 2011.7) : 770円  
 特集 人権学習のアクティビティ 思想と実践～結婚に関する学習を中心に～  
 解放新聞 2512号 (解放新聞社刊, 2011.3.28) : 80円  
 解放の文学 59 「愛のかたち」の末路 有島武郎『或る女』 音谷健郎  
 解放新聞 2513号 (解放新聞社刊, 2011.4.4) : 120円  
 山口公博が読む今月の本  
 『海炭市叙景』(佐藤泰志著) / 『日本の解放区を旅する』(鎌田慧著) / 『仏教入門』(松尾剛次著)  
 ぶらくを読む 59 藤木戦国史論が明らかにした中世像と被差別民の位置 湧水野亮輔  
 解放新聞 2514号 (解放新聞社刊, 2011.4.11) : 80円  
 福島第1原発で、いま、起きていること 小林圭二さん  
 解放新聞 2515号 (解放新聞社刊, 2011.4.18) : 80円  
 今週の1冊 『江戸絵画の不都合な真実』(狩野博幸著)  
 解放新聞 2516号 (解放新聞社刊, 2011.4.25) : 80円  
 解放の文学 60 「冬の時代」抵抗の流儀 黒岩比佐子  
 『パンとペン』 音谷健郎  
 解放新聞 2517号 (解放新聞社刊, 2011.5.2) : 120円  
 今週の1冊 『戦争と日本人 テロリズムの子どもたちへ』(加藤陽子, 佐高信著)  
 ぶらくを読む 61 大逆事件100年が教えるもの えん罪・誘導世論・閉じた村社会 1 湧水野亮輔  
 09年度インターネット差別書き込みモニタリング事業報告 1 千葉県人権啓発センター  
 解放新聞 2518号 (解放新聞社刊, 2011.5.16) : 80円  
 09年度インターネット差別書き込みモニタリング事業報告 2 千葉県人権啓発センター  
 解放新聞 2519号 (解放新聞社刊, 2011.5.23) : 80円

## 事務局よりお知らせ

今年度前半の部落史連続講座が無事終了しました。後半は11月から12月にかけて開催する予定です。内容が決まり次第ホームページ・メルマガ等でお知らせいたしますので、ふるってご参加ください。

2010年度の部落史連続講座講演録が出来上がりました。ご希望の方は下記までご連絡ください。また、2009年度までの講演録は、冊子体は在庫がなくなりましたが、ホームページで読むことができますのでご覧下さい。アドレスは <<http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>> です。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分